

保育者の考える自然とのかかわりのねらいの実態

——環境教育の観点からの分析——

井上美智子 無藤 隆*

キーワード：保育、ねらい、環境教育

1. はじめに

日本の保育は公的なガイドラインにおいて子どもが自然とかかわる重要性を常に確認し、具体的な活動としての「飼育栽培」や「戸外保育」を大正時代から実践してきた¹⁾。しかし、近年、具体的な自然体験不足という子どもの実態を受け、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の改訂(改定)等にその対策が具体的に反映され、自然とかかわる活動の重要性が以前にも増して指摘されるようになってきている。

そして、現代の教育課題である環境教育分野も幼児期に自然との豊かなかかわりを求めているが、大正時代から実践され続けてきた「飼育栽培」や「戸外保育」の目的と20世紀の後半に誕生した環境教育の目的は同じではない。著者の1人は、幼児期の環境教育とは、「幼児期の発達理解を元に、子どもの主体的な遊びを重視しながら、持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」と定義したが、そこでいう環境とは「自己(人間)を取り巻く外界(自然～人～生活)」であり、その場合の自然は「人間がその一部であり、人間の生存の基盤をなす存在であり、有限性・多様性・循環性を持つ存在」を意味して

いる²⁾。幼児期の環境教育を考える際には、こうした環境教育・環境・自然のとらえ方に基づいて保育の生活における自然とのかかわりをとらえ直すことが必要だとした³⁾。しかし、保育実践が保育者自身によって言語化される機会の一つである園内研究事業における報告書等の記載内容を分析したところ、自然とのかかわりを主題にした活動でも、実践主体である保育者のねらいの立て方や活動の選択、援助や評価の際の着眼点などに環境教育的観点(自然・生活・人のつながりや多様性・循環性等に代表される生態学的な自然のとらえ方)はあまり意識されていないことがわかった⁴⁾。

実践では保育者の考えるねらい・内容が子どもの活動に反映されるため、自然とのかかわりを環境教育の観点からとらえ直す場合にも、保育者自身が環境教育につながるねらい・内容を意識しているかどうかは鍵となるであろう。筆者らは、保育現場における自然体験活動の実施実態を明らかにし、環境教育の観点からの課題を整理するため、2004年に幅広い項目をあげた質問紙調査を実施した。その結果、自然体験は園庭や地域において、伝統的な「飼育栽培」と「戸外保育」という活動を中心に比較的によく実施されており、公立・私立、幼稚園・保育所、地域によって実施頻度や考え方に違いがあること、環境教育の観点からみると不十分さが認められることを現在までに報

*白梅学園大学 教授

告してきた⁵⁻⁸⁾。同調査において、自然とのかかわりのねらいについての質問項目も設置したので、ここでは自然とのかかわりのねらいとして環境教育的観点から保育者によってどの程度意識されているのかをみることにした。

2. 保育者のあげたねらいの実態

(1) 方法

東京都及び兵庫県（以下、「都県」と表記）の公立・私立（以下、「公私」と表記）の幼稚園及び保育所（以下、「幼保」と表記）を対象に（都県別・公私別・幼保別の8カテゴリーに分け、乱数表を用い各カテゴリーから200園を抽出）、郵送による質問紙調査を2004年3月に実施した。有効送付数・回収数・回収率は表1の通りで、総回収数は427園（回収率27.3%）であった。質問は2003年度の5才児クラス対象の自然体験活動全般にわたるものを8項目群に分けて設定し、う

ち一つが「子どもと自然とのかかわりのねらいとして、先生が大切にしたいと思われるものは何ですか。三つ以内でお教え下さい。」という質問項目で、三つの回答枠内に自由に記述してもらった。

ねらいに関する上記の問いに回答したのは377名（全回答者の88.3%）で、延べ879の回答（1人あたり2.3回答）があった。まず、日本語として同じ内容を意味していると判断した回答を同一種類とみなし（例：「命の大切さ」・「命の大事さ」・「命の尊さ」）、延べ879の回答を121種類の回答に分類した。評定者による一致率をみるため、10%の回答をランダムに抽出し筆者ら以外の3名の評定者が分類を行った結果、カッパ係数は「実質上一致する」とみなせる範囲内の0.625～0.769となった。

(2) 結果

「大切にしたいねらいは何か」という問いであったので、現在の要領や指針に従えば、「生きる力の基礎となる心情、意欲、態度」や「子どもが身に付けることが望まれる心情、意欲、態度」を示す回答になるはずである。「冒険心」・「好奇心」・「創造力」・「表現力」・「科学性」・「豊かな人間性」・「自然に親しむ」等の子どもに育ってほしいこと、及び、「観察」・「工夫」・「心地よさ」・「開放感」等の子どもに経験してほしいことが心情・意欲・態度を表しているとみなすと、それらの回答で121種類の回答のうち77種類（63.6%）を占めた。それ以外の回答は、「季節」・「雄大さ」・「調和」・「恩恵」等の言葉で表されるような子どもに気づいてほしい自然の性質や姿があげられていた。

ねらいとしてあげられた回答121種類のうち全回答者377名のうち5%以上（18名以上）の回答者によって共通して記された回答が9種類あり、図1はそれら9種類の回答者割合を示したも

表1 回収園数と回収率

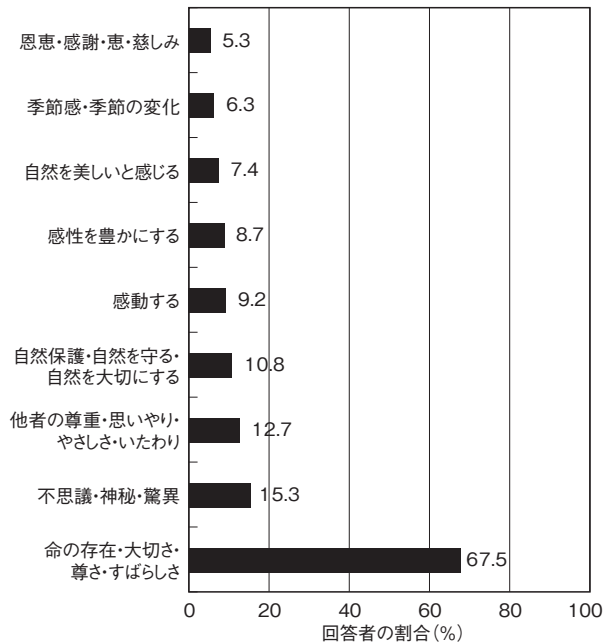
都県	幼保	公私	有効送付数	回収数	回収率 (%)
東京都	保育所	公立	193	30	15.5
		私立	198	49	24.7
	幼稚園	公立	192	63	32.8
		私立	199	43	21.6
兵庫県	保育所	公立	192	61	31.8
		私立	198	61	30.8
	幼稚園	公立	194	62	32.0
		私立	198	58	29.3
合計	保育所	公立	385	91	23.6
		私立	386	110	28.5
	幼稚園	公立	386	125	32.4
		私立	397	101	25.4
総計			1564	427	27.3

※井上・無藤（2006）より転載

のである。中でも「命の存在・命の大切さ・命の尊さ・命のすばらしさ（を知る）」という回答が群を抜いて多く、回答者の67.5%がこの答えを記した。そして、「不思議・神秘・驚異（を知

る）」(15.3%)、「他者の尊重・思いやり・やさしさ・いたわり（を育てる）」(12.7%)、「自然保護・自然を守る・自然を大切にする」(10.8%)と続いた。

次に、井上（2008）⁹⁾で採用した分析の基準①「科学性の芽ばえ」（例：自然要素を対象に観察したり、気づいたり、工夫したり、利用して遊ぶ）、②「豊かな人間性の涵養」（例：自然に親しんだり、美しいと感じたり、命の大切に気づく）、③「自然～人～生活のつながり」（例：自然体験と生活体験が同時に含まれていたり、地域の人と一緒に活動したりするなど自然とかがわる場面で生活と人とのかかわりが同時に評価される内容）、④「生態学的自然観」（例：自然の多様性や循環性への気づきが評価される内容）に基づき、121種類の回答を分類してみた。その結果、①「科学性の芽ばえ」には121種類の回答中19種類（15.7%）が、②「豊かな人間性の涵養」には31種類（25.6%）、③「自然～人～生活のつながり」には14種類（11.6%）、④「生態学的自然観」には6



※全回答者のうち5%以上の回答者が記述した回答上位9種類

図1 回答者が記述した自然とのかかわりのねらい

表2 4つの観点から分類されたねらい

自然と関わる意義の分類	ねらいとしてあげられた語句
科学性の芽生え	工夫／観察／追求する／調べる／試す／疑問を感じる／発見する／考える／概念を広める／興味関心を持つ／いろいろな生き物に触れる／飼育栽培経験／自然や生きものの性質／成長・生長／変化／不思議・神秘・驚異／好奇心／探求心／科学性
豊かな人間性	生きている実感・喜び・楽しさ／感動する／感覚（五感）を使う・楽しむ・育てる／お墓をつくって花を捧げる経験／素晴らしさ／尊さ／大きさ・雄大さ・偉大さ／命の存在・大切さ・尊さ・すばらしさ／恩恵・感謝・恵・慈しみ／他者の尊重・思いやり・やさしさ・いたわり／自然（神）への畏敬畏怖／自然の中で過ごす喜び／自然を好きになる・愛する・親しむ／自然保護・自然を守る・自然を大切にする／広い心／豊かな心／豊かな人間性／創造性・創造力／表現力／協力／仲間と共感／共に育つ／共に痛みを知る／互いに認め合う／仲間作り／人とのかかわり／感性を豊かにする／自然を美しい・きれい・かわいい・すてきと感じる／自然・生きものへの愛護心・愛情・愛着／育つ喜び・育てる喜び／栽培を楽しむ・世話を楽しむ
自然～人～生活のつながり	世話をする大切さ・必要性／季節感・季節の変化／怖さ・恐ろしさ・脅威・危険・痛さ／自分も自然の一部／自然は不可欠・生かされている／自然と人の関わり／自然を壊すのも守るのも人間／失ったら戻らないもの／資源を大切にする／自然を育てようとする心／環境保護・環境を守る・環境を大切にする／地域・ふるさとへの思い／生活力／食文化－栽培の過程を大切に
生態学的自然観	自然のバランス／命が受け継がれていくこと／連鎖・循環・つながり・相互関係／共生・共存／多様性／多様な生きものの存在を認め合う

※回答者の記述したねらいを井上（2008）に従い、4観点に分類した

表3 8カテゴリーごとにみたねらい9種類の回答者の割合

ねらい	カテゴリー		東京				兵庫			
			幼稚園		保育所		幼稚園		保育所	
	公立	私立	公立	私立	公立	私立	公立	私立		
恩恵・感謝・恵・慈しみ	0.0	5.3	0.0	6.5	7.1	8.9	7.1	5.5		
季節感・季節の変化	6.8	5.3	4.5	10.9	5.4	4.4	3.6	9.1		
自然を美しいと感じる	8.5	2.6	13.6	6.5	12.5	4.4	3.6	9.1		
感性を豊かにする	13.6	5.3	0.0	8.7	10.7	4.4	14.3	5.5		
感動する	10.2	5.3	4.5	2.2	10.7	13.3	10.7	12.7		
自然保護・自然を守る・自然を大切にす	6.8	18.4	9.1	8.7	8.9	17.8	8.9	10.9		
他者の尊重・思いやり・やさしさ・いたわり	8.5	10.5	18.2	8.7	10.7	8.9	10.7	27.3		
不思議・神秘・驚異	30.5	15.8	4.5	10.9	23.2	13.3	12.5	3.6		
命の存在・大切さ・尊さ・すばらしさ	69.5	52.6	63.6	69.6	78.6	64.4	67.9	69.1		

※回答者割合が全体で5%以上の9項目についてカテゴリーごとに回答者割合(%)を示した。

種類(5.0%)の回答が該当すると判定した(表2)。それ以外の51種類(42.1%)は①から④のいずれにも該当するとみなすことはできず、「心身の健康」の育ちにつながるものや「自然への畏敬」など多様な回答があげられた。

表3は、図1に示した9種類の回答について都県、幼稚園・保育所、公立・私立の8種のカテゴリーごとに回答者割合(%)を示したものである。どのカテゴリーにおいても「命の存在・大切さ・尊さ・すばらしさ(を知る)」という回答の回答者割合が群を抜いて多かった。それ以外の回答については、東京都・兵庫県とも公立幼稚園で「不思議・神秘・驚異」が、私立幼稚園で「自然保護・自然を守る・自然を大切にす」が2番目に回答者割合が多かったという共通点がみられたが、他の回答についてはカテゴリーに共通して認められる傾向はなかった。

(3) 考察

保育者が自然とのかかわりに求めるねらいには多様なものがあげられていた。井上(2008)が分析した兵庫県の幼稚園の教育課程・指導計画・保

育指導案・事例の記載においては、自然とのかかわりには「豊かな人間性の涵養」と「科学性の芽ばえ」につながるねらいや育ちの読み取りがあげられることが多かった¹⁰⁾。しかし、本稿で保育者があげたねらいには、その二つにとられない多様な回答が含まれており、公式の園内研究等で立てられるねらいと個々の保育者が願いとして持つねらいには異なる実態があることが伺えた。ただし、都県や幼保、公私を問わず、多くの保育者に共通してあげられたのが「豊かな人間性の涵養」の一部としての「命の存在・大切さ・尊さ・すばらしさ(を知る)」であった。このねらいは、公的な保育のガイドラインにも自然とのかかわりの意義を示す文脈で必ず示されてきたものであり、公式の園内研究等で立てられるねらいとしてもよく取り上げられる。個々の保育者の願いとしても定着し、また、共感を得やすいねらいなのであろう。その他では、幼稚園の公立・私立別にみた場合に2番目に多かった回答に都県にかかわらず共通の結果が認められた。公立幼稚園で「命の存在・大切さ・尊さ・すばらしさ(を知る)」の次にあげられた「不思議・神秘・驚異」という回答

は、「幼稚園教育要領」の自然とのかかわりの解説等によく現れる表現で、公立幼稚園が「幼稚園教育要領」により誠実に沿った保育をしている現れではないかと考えられる。一方、私立幼稚園で2番目にあげられた「自然保護・自然を守る・自然を大切にする」という回答は社会の変化に応じた現代的なねらいと読むことも可能だが、「幼稚園教育要領」の刊行時から指導書等に示されてきた古典的な表現でもあり、1989年に「自然」という領域がなくなってからは「幼稚園教育要領」やその指導書、解説書等には記載されなくなったものである。法人の教育理念が重視される私立幼稚園では「幼稚園教育要領」には示されない項目でも重視できるのかもしれない。

3. ねらいの実態を環境教育の観点からみる

以上に示した自然とのかかわりという活動を想定して保育者があげたねらいの実態を環境教育の観点から見直す前に、まず、保育におけるねらいの位置づけを確認する。ねらいという概念は、公的な保育史においては1956年に刊行された「幼稚園教育要領」から使用され始めた。そのとらえ方は改訂の過程で変化してきたが、現在の保育のガイドラインでは「幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度」（「幼稚園教育要領」、2008）、あるいは、「保育の目標をより具体化したものであり、子どもが保育所において、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、保育士等が行わなければならない事項及び子どもが身に付けることが望まれる心情、意欲、態度などの事項を示したもの」（「保育所保育指針」、2008）である。保育の全期間を見通した全体的な計画である教育課程・保育課程にもねらいは示されるが、それらは要領や指針に示されたねらいを具体化したもので、保育者が園や子ども、地域の実態に即して立てることにな

っている。さらに、教育課程・保育課程を具体化した年間計画・月案・週案・日案等の期間に応じた指導計画にもねらいは記され、評価や反省の際の観点となる。同じ「ねらい」という言葉が使われるが、対象とする期間によってその具体性が異なる。このように、ねらいは保育者によって「期待される」あるいは「望まれる」育ちを教育課程・保育課程や指導計画に示したものであり、保育者はそれを達成するために内容を考え、保育実践を行う。

保育におけるねらいと実践・評価との関係を明らかにする研究は意外に少なく、実践にあたって現職者が長期・短期の指導計画においてどのようなねらいを立てているかの実態把握もあまりなされていない。その中で、小川は、保育実践におけるねらいや内容を「臨床目標」とみなし、「目標が達成されているかどうかは、持続的観察と多くの保育者による間主観的評価が決める」とする^{11, 12)}。また、師岡は保育者の「構想力」モデルを提案して実践分析を継続しているが、その中でねらいの前提として「保育者の頭の中で構想されるもの」と「ねらいを実現するための内容」がどのようにつながっているか、及び、子どもの実態理解が重要だと指摘する^{13, 14)}。小学校以上で示される到達度を評価する基盤となる各授業ごとの指導目標（到達目標）とは異なり、保育ではこうしたとらえ方が通常で、日案におけるねらいも到達目標のように扱われることはない。

保育のねらいが上述のように保育者の願いを反映するものであると同時に、指導計画を立て、子どもの実態を読み取り、実践後の評価をし、次の実践を考えるとという過程において一つのより所となることを前提として、保育者のあげたねらいの実態を環境教育の観点から見直してみる。幼児期の環境教育は自然体験であると主張されることが多いが^{15~19)}、保育においては大正期から伝統的な保育内容として飼育栽培や戸外保育等の自然体

験活動は実践され続けてきた。そうした活動を環境教育につながる実践にするためには、単に「飼育栽培をした」・「自然のある戸外で遊んだ」だけに終わらせずに、自然とかかわる活動を行う際に、ねらいや内容、環境構成に環境教育の観点が意図的に反映させられているかどうかを確認しなければならない。飼育栽培でも常に生物同士の関係や人間の営みである生活との関係が意識され、人間自身も生態系の一部であることを経験する機会とできるかどうかである。これは、幼児期の段階ではそうした知識を得るという意味ではない。子どもが遊ぶ場所である戸外の園庭の自然に生物の多様性があり、小さな生態系が存在し、生物の生活史や生物間のつながりに気づけるような環境であることが望ましく、飼育栽培にもそうした気づきが入り込むような活動が望ましいという意味である。保育者がそれらの自然の性質に気づいたり、環境を創り出したり、子どもの気づきを援助したりするためには、従来示されてきたようなねらいと内容だけから考えることは難しい。晩秋の日案であれば「秋の深まりに気づく」という抽象的なねらいの代わりに、「秋という季節における生きものの暮らし方に気づく」という具体的なねらいを立てた場合の方が、生物の種類や数が減り、行動も変化してきていることに保育者の意識が向かいやすくなる。

環境教育の観点から本稿の結果を見直すと、自然とのかかわりに「環境保護・環境を守る・環境を大切にする」や「連鎖・循環・つながり・相互関係」、「多様な生きものの存在を認め合う」などの環境教育の目的と一致する願いを持っている保育者もいて、多様な願いを保育者が持っていることは望ましいと評価できる。しかし、それらの保育者の願いが短期の指導計画作成時に具体的なねらいや内容、あるいは環境構成にまで反映されなければ、今まで通りの実践が繰り返されるだけである。本調査の別の項目で明らかにした自然体験

の具体的な活動内容や環境構成としての園庭の自然環境も、環境教育の観点からは不十分な実態であった^{20~23)}。本稿の結果で公立幼稚園の回答者が「幼稚園教育要領」に準拠した表現をあげる傾向にあったという結果は「幼稚園教育要領」に忠実に沿った保育をする公立幼稚園として当然の結果であろう。しかし、これは「幼稚園教育要領」に含まれないねらいは優先されにくいと言い換えることも可能で、実際に野々村らの保育者を対象とした調査でも保育者は指導計画を立てる際には要領や指針を参考にしていると回答している²⁴⁾。保育者が環境教育につながる願いを個人として持っていて、ねらい・内容・環境構成の中にそれが意識されなければ、保育実践に反映しにくくなるのではないだろうか。

本稿の調査実施から既に6年が経過したが、その間に「教育基本法」(2006)が改正され、教育の目標に「環境保全」が明記され、「学校教育法」(2007)にあげられた幼稚園教育の目標にも初めて「自然」という言葉が入った。しかし、それらの自然とのかかわりに関係する部分の改正は、「幼稚園教育要領」(2008)や「保育所保育指針」(2008)の改訂(改定)後の本文や解説の文面にはほとんど反映されていない。環境教育は1970年代から世界的に認知された教育課題であり、生涯にわたっての実施が必要とされて、開始期として幼児期が常に記されてきたが、幼児期の環境教育は現実にはなかなか普及してこなかった²⁵⁾。その背景には様々な要因があるが、幼児期からの環境教育が実践されるための一つの具体的な方策として、自然とのかかわりに関して保育者が持つ多様な願いがねらいへと反映できるような具体的な記載がガイドラインに求められる。また、本稿では、「子どもと自然とのかかわりのねらいとして大切にしたいもの」という漠然とした問いであったために、示された回答も本来の「ねらい」とは異なると思われるものも含まれていた。次の段階

として、保育者の願いがどのように指導計画における具体的なねらいに反映されるのか、また、子どもの活動としては同じようにみえても保育者の立てるねらいに環境教育的観点が含まれるか否かで、内容や環境構成、援助、評価等がどのように異なってくるのかの過程を今後明らかにしていきたい。

謝辞

調査にご協力いただきました東京都・兵庫県の幼稚園・保育所の先生方に感謝申し上げます。

付)

本調査は、文部科学省科学研究費補助金（課題番号15500601）により実施したものである。

参考文献

- 1) 井上美智子, 2000, 日本の公的な保育史における「自然とのかかわり」のとらえ方について, 環境教育, 9-2, pp.2-11.
- 2) 井上美智子, 2009, 幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題, 環境教育, 20-1, pp.95-108.
- 3) 井上美智子・無藤隆・神田浩行, 2010, 『むすんでみよう 子どもと自然』, 北大路書房.
- 4) 井上美智子, 2008, 幼稚園における自然や環境を主題とした園内研究事業の実施状況と実施内容－環境教育の視点からの分析－, 大阪大谷大学紀要, 43, pp.54-71.
- 5) 井上美智子・無藤隆, 2006, 幼稚園・保育所の園庭の自然環境の実態, 乳幼児教育学研究, 15, pp.1-11.
- 6) 井上美智子・無藤隆, 2007, 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態, 教育福祉研究, 33, pp.1-9.
- 7) 井上美智子・無藤隆, 2009, 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 (2), 教育福祉研

- 究, 34, pp.1-7.
- 8) 井上美智子・無藤隆, 2010, 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 (3), 大阪大谷大学紀要, 43, pp.117-132.
- 9) 前掲論文 (4)
- 10) 前掲論文 (4)
- 11) 小川博久, 1977, 幼稚園教育課程編成の問題: 「指導計画」における記述のしかた, 東京学芸大学紀要 (第1部門, 教育科学), 28, pp.71-84.
- 12) 小川博久, 2010, 『遊び保育論』, 萌文書林, pp.208-212.
- 13) 師岡章, 1997, 保育者の「構想力」に関する研究, 保育学研究, 35(2), pp.296-303.
- 14) 師岡章, 2000, 保育者の〈見識〉とねらいの在り方に関する一考察, 白梅学園短期大学紀要 36, pp.1-14.
- 15) 山内昭道, 1992, 環境教育はおとなによる環境保全から, 現代保育, 40, pp.46-49.
- 16) 大島順子, 1992, 『日本型環境教育の「提案」』, 清里環境教育フォーラム実行委員会編, p.43, 小学館.
- 17) 大澤力, 1999, 「環境教育」の視点からみた幼稚園園庭樹木の現状と活用の課題, 環境教育, 8-2, pp.55-63.
- 18) 田尻由美子・峰松修・井村秀文, 1996, 幼児期環境教育の現状と課題, 精華女子短期大学紀要, 22, pp.129-140.
- 19) 田尻由美子, 2002, 保育内容環境の指導における環境教育的視点について, 精華女子短期大学紀要, 28, pp.19-28.
- 20) 前掲論文 (5)
- 21) 前掲論文 (6)
- 22) 前掲論文 (7)
- 23) 前掲論文 (8)
- 24) 野々村千恵子・仲野悦子・林秀雄, 1996, 保育指針と教育要領の比較: 「ねらい」をとおして, 聖徳学園女子短期大学紀要, 26, pp.45-56.
- 25) 前掲論文 (2)